

「インドネシアスプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学薬学部2年 (長谷部 依央)

①学習効果

実は行きの飛行機(関空からシンガポールのトランジットの飛行機)で、隣のシンガポールの女性とひよんなことからとても仲良くなった。その時、少しばかり中国語が話せたことでより会話が弾み、シンガポールについて色々教えてもらった。国際理解という大きく考えがちであるが、結局は人と人のつながりである、ということに気づかされた一場面であった。また、彼女は社会人であり、仕事の話をしてくれたが、自分も自分の研究などについてもっと話せたらよかったと感じた。

また、これまで滞在していた都市では現地の言葉がわからなくても特異な英語でカバーしていた面が大きかったが、インドネシアでは英語や日本語が話せるのは限られた人たちだけだった。食堂のお兄さんも街中のバイクタクシーも、また、授業もほぼすべてインドネシア語だけだったので、授業で習った基本単語や表現を駆使し、何とかコミュニケーションを図ろうとしたのは新しい経験だった。同じ授業を受けていてもどんどん使っている人ほどタクシー運転手ともどんどん会話ができるようになっており、言語力向上は実践あるのみだと感じた。

最後に、インドネシア大学の学生の中には power point の使い方が洗練されている学生が数人いた。今まで何となくで使っていた power point だが、彼らに聞いたスキルなどを練習して身に付けようと思った。

②海外ならではの経験

インドネシアに来て新鮮だったことは3点ある。

1点目は、交通量の多さだ。急激に発展途上、都市への人口流入した結果、首都ジャカルタでは交通渋滞が深刻だ。また、バイクと車が主流なため、Uber の一種である、Gojek と Grab が発達している。現在地と行先を入力すると近くのドライバーとマッチングができ、その場で値段も表示される。とても効率的なシステムであり、この点では日本よりも進んでいるといえる。

2点目は、時間間隔のずれだ。よく海外の国は時間にルーズというが、まさにその通りである。電車の到着時間も読めないことがしばしばある。現地で仲良くなった友達と待ち合わせしても、渋滞に引っかかったり、お祈りの時間になってしまったり、などと色々重なって1時間後にやっと合流できることが普通だ。

3点目は、宗教に関する意識の差だ。インドネシアは無宗教が法律違反であり、国民はイスラム教、仏教、キリスト教、あるいはヒンドゥー教のいずれかを信仰しなければならない。この点に興味をもち、このプログラムに応募した。しかし、実際にこの点についてどう考えているかについてUIの学生に聞こうとすると、「それは sensitive な問題だ。」と言われ、あまり深く聞くことができなかった。さらに、モスクに観光に行った際、クリスチャンであるUIの学生は「追い出されるかもしれない」と言っていて大変怖がり、始終インドネシア人であるとわからないように振舞っていたことから、多様な宗教を信仰する人々が同じ国の中でまとまるのは相当難しいことなのだ痛感した。

③プログラム内容

日本で10時間インドネシア語の授業を受けたのち、現地で授業を受けた(挨拶、場所の行き方、数字、買い物の仕方、自己紹介、職業などを学んだ)。また、午後に文化授業(batik、スマトラ島伝統踊り、

ガムランの授業)にも参加し、週末や放課後にはタマン・ミニやパサール、イステイラルモスクを訪れた。最終日にテスト(文法、読解、リスニング、会話)があり、UIの学生との合同発表(私たちの班は辛さから見るインドネシアと日本の違いについて発表した)もある。その他に UI 日本学科の翻訳の授業を見学した。

④進路への影響

ルームメイトが、内定が決まっている先輩であったことや、現地で仲良くなった生徒が今年9月に東京本社就職が決まっていたこともあり、今後の進路について考える機会が多くあった。大学院に進学するか、就職するか、という選択がまずあるが、実務経験のために就職してから大学院に進学するか、海外の大学院へ留学するかまだ検討している。どちらにせよ、大学院は進学したいという気持ちが強くなった。また、短期間の海外留学を重ねていくうちに、海外に行って実際に学ぶことは有形無形で多大であり、やはり大学院も海外で学びたいと思うようになった。